

改善はモノマネ大歓迎 改善はパクリを奨励

マネ・パクリの奨励

改善の推進とは

「ひとつの方法」に囚われるな。

もっと良い方法があるだろう。

他社では、そんなアホなことはもうやってないぞ。

※ちよつと見こころ

※聞いてこころ

※調べてこころ

※盗んでこころ

——というもの。

早い話が、改善は他者のアイデア

の「マネ・パクリ・盗用」を奨励する

◎参考にしたのか

◎ヒントを得たのか

——など、どうでもいいからだ。

なぜなら、改善は発明や特許を取

ろうというものではない。ゆえに、

改善には「新規性」や「独創性」は求

められていない。

それよりも改善は「手っとり早さ」

を重視する。手っとり早く「より良い

方法」を取り入れ、それで「自分の仕

事」が少しでも良くなれば、それらは

すべて改善である。

「せっかくの改善」に対して、

「他職場で、実施されているからダメ」

「他職場のモノマネにすぎない」

「モノマネはダメ」

——などと、言われたことがないだ

ろうか。

だが、このような「セリフ」は意味

がない。なぜなら、「実施型・改善制

度」では「アイデアの出所を問わない」

からだ。

つまり、その「改善のアイデア」を

その人が自分で考えたのか、それと

も「他社・他職場・他者の改善」を見て、

◎マネたのか

ものである。

もちろん、「企業秘密」などを盗む

と、大変なことになる。だが、改善

はそんな「大それたこと」をやれと言

っているのではない。

他社では、すでに「常識・アタリマ

エ・当然」となっていることでも、

自社・自職場では実施していないこ

とがある。

それをマネて、自分の仕事に取り

入れたら、改善である。

まさに、改善は

「モノマネ歓迎」

「パクリ大歓迎」

「盗用を大いに奨励」

——というもの。

「前例」を基にさらに改善

「改善の3原則」は

①やめる

②へらす

③カエル

改善は
アイデアの
出所を問わない



モノマネ大歓迎
マネてパクって
どんどん改善すべし
実施型・改善制度

モノマネはダメー！
他社でやっているからダメー！

改善の5段活用

改善3原則+マネる・パクる

① やめる (廃止・排除・中止)

不要・ムダ・過剰・重複——をやめるのが改善
 「昔は必要だったが、今は不要」をやめるのが改善。
 「改善しない人」は、状況が変わり、不要となっているのに、
 惰性で、いつまでもムダなことをやっている。

② へらす (削除・減少・部分的中止)

「やめる」ことができなければ減らすべし。「ムダな動き」など
 少しでも減らせばラクになる。特に、共有化・共通化・
 共用化・共同化、あるいは一体化・一括化などの
 定石でムダや過剰を減らすことができる。

③ カエル (変える・替える・代える・換える)

「減らす」ことができなければ、要素や条件を変えるのが改善。
 変える対象はハードでもソフトでもいい。「変え方」は
 ＊視覚化・定置化・定型化・同時化—
 ＊見える化・わかる化・やりやす化—
 ＊ビジュアル化・ユニット化—など

④⑤ マネる パクる (盗む・他人活用)

アイデアが浮かばない時、自分のアタマだけで考える
 必要はない。他者のアイデアを拝借・借用すればいい。
 そのほうが手っとり早く改善できる。

他者のアイデアをマネて、パクって、

ちよいと改善、さらに改善、もっと改善。
 これが「手っとり早い改善・より良い改善」の極意。

とにかく、「不要なこと」や「ムダな
 こと」を「やめる」のが改善である。
 もちろん、どうしても、「やめられ
 ない」ものもある。その場合は、「減
 らす」という次の手がある。

そして、もう、これ以上は減らせ
 ない場合は、イロイロな条件や要素を
 「変えてみる」という、さらなる「次
 の手」が勧められる。
 とは言うものの、

「何を変えたらいいか、わからない」
 「どう変えたらいいか、わからない」
 「良いアイデアが出てこない」
 ——という場合もあるだろう。

だが、そんな時でも、悩む必要は
 ない。アイデアが出なければ、もっ
 と、もっと効果的な「奥の手」がある。
 それは「マネる・パクる」だ。
 世の中には、すでに、多くの改善
 がなされている。ゆえに、それらを
 「マネる・パクる」のが最も手っとり
 早い改善である。
 すでに、多くの「前例」があるのに、

それらを自分ひとり、ゼロから考え、
 悩むほど、ムダなことはない。
 それら「前例」を基にして、考える
 のが「改善的な対応」である。つまり、
 「マネて、パクって、ちよいと改善」
 というのが「改善の極意」である。そ
 れができるようになれば、「改善の免
 許皆伝」だ。

改善の5段活用

問題にぶつかったら、まず
 ① やめられないか
 ② 減らせられないか
 ③ 変えられないか
 ——を考える。
 そして、どうしても良いアイデア
 が出なければ、「他人のアイデア」を
 ④ マネる
 ⑤ パクる
 が勧められる。
 ところが、おもしろいことに、
 「他者の改善をマネよう」

「他者のアイデアをパクろう」
 とすると、そこに工夫が生まれる。
 なぜなら、いくら「良い改善」でも、
 それらが、そっくりそのまま「自分の
 仕事」に使えるわけではないからだ。

規模や条件・状況——など、それ
 ぞれ職場によって異なるので、多少
 のアレンジは必要だ。
 しかし、それは、けっして「大変」
 ではない。「ちよっと変える」だけの
 「小変」にすぎない。ゆえに、誰もが
 簡単にできる。ちなみに、

① 「やめる」
 ② 「減らす」
 ③ 「カエル」
 という「改善の3原則」に
 ④ 「マネる」
 ⑤ 「パクる」
 を加えたものを「改善の5段活用」と
 いう。

「他人活用」 「他人の知恵活用」の知恵

何もかも「自分のアタマ」で考えようとすると「大変」だ。だが、他者の改善をマネて、「自分の仕事」に応用するのは難しいことではない。

ちよつと変える、小さく変えるという「小変」に過ぎない。すなわち、「マネて、パクってチョイと変える」というのが、最も手つとり早く、最も効果的な「改善ノウハウ」である。

☆ この世には「一〇〇%独創的なもの」など存在しない。いかなる天才の発明であろうとも、その人が「まったくゼロ」から、すべてを考え出したわ

けではない。

何十万年にわたり蓄積されてきた人類の膨大な「知識・知恵・ノウハウ」に、ちよつとアイデアを付け加えたにすぎない。天才とは「マネて、パクって、チョイと変える」ことの「最先端の実践者」にすぎない。

まして、天才ならぬ凡人なら、なおさら「平凡なアタマ」を捨てるよりも、もつと積極的に、「他者の改善やアイデア」をマネて、パクって、手つとり早く改善すべきだろう。

「積極的なマネの姿勢」は「より良い改善」へのアンテナを張り巡らし、

常により良いアイデアに目を配ることにつながる。それは視野を拡大し発想の幅を広げる。

ヒント・参考・拝借

「マネる・パクリ・盗む」などの言葉に抵抗があるなら、

- ◎ 「ヒントにする」
- ◎ 「参考にする」
- ◎ 「拝借する」
- ◎ 「借用する」

——と言い換えてもいい。

どれも同じような意味である。そ

ラクチン化・快適化
これは使える!

マネて
パクって
ちよいと改善



れぞれ「自分の好きな言葉」を使えばいい。人類は互いのアイデアやノウハウを、

- ◎ ヒントにして
- ◎ 参考にして
- ◎ マネて
- ◎ パクって
- ◎ 盗用して
- ◎ 借用して
- ◎ 拝借して

——発展してきた。

その末裔である我々も、人類史の延長として、「他者の改善やアイデア」を堂々とマネて、パクればいい。

また、「お知恵拝借・アイデア借用」などと言っても、なにも律儀に返却、返済する必要はない。

「借りた金」は返さなければならぬが、「常識的なアイデア」などは、借りっぱなしで結構。踏み倒してもかまわない。

つまり、「改善活動」とはお互いの改善の「マネ合い・パクリ合い」だ。

改善の共有化=マネ・パクリ 他人活用=他人の知恵活用

何もかも「自分のアタマ」で考えるのは大変だ。だが、他者の改善をマネて、「自分の仕事」に応用するのは簡単である。

マネて、パクって、チョイと変えるのが、もっとも手っとり早く、もっとも高度な「改善ノウハウ」である。

マネる・パクリ・盗む
= ヒントにする。参考にする。
= アイデアの拝借・借用・応用

もっと積極的に、もっと自信をもって、「他社・他職場・他者の改善&アイデア」をマネて、パクって、「自分の仕事の改善」に応用すべし。

「積極的なマネ・パクリの姿勢」が**視野の拡大**や**発想の転換**をもたらす

「使えるもの」は、すべて「使いこなす」のが改善

- ① 機能活用
- ② 補助具活用
- ③ サービス活用
- ④ 制度&システム活用
- ⑤ **他人活用**：他人のアタマ&知恵の活用

それを一般的用語で言えば「共有化」である。

漢語の「共有化」は、なんとなく厳かな感じがある。だが、それをわかり易く言えば、「マネ合い・パクリ合い」である。

「改善発表会」の「目的」として、「改善ノウハウの共有化」が掲げられている。だが、そのような「抽象的な言葉」を使っているかぎり、共有化は進まない。

だが、「発表会の目的」は「お互いの改善のマネ合い・パクリ合い」と言えば、非常にわかり易い。

参加者も、漠然と聞くのではなく、発表事例から、何かひとつでも「マネよう、パクリよう」とするので、共有化が促進される。

ゆえに、自信をもって、「他社・他人の改善」をマネて、パクって、自分の仕事をさらに改善、もっと改善すべきである。

「使えるもの」は、すべて活用するのが改善

「使えるもの」はすべて活用するのが改善だ。それでも、まだ「マネる・パクリ」に抵抗のある人には、「他人活用」という言葉が勧められる。

「改善の定石」には「○○化タイプ」に加えて「機能活用・補助具活用・制度活用・サービス活用」などのような「○○活用タイプ」がある。

この「他人活用」こそ、最も高度で最も効果的で、最も手っとり早い「改善の定石」である。

とにかく、世の中にあるもので、使えるものはすべて「使いこなす」のが「○○活用」という改善だ。

その中でも、最も強力なのが「他人の活用」、または「他人の知恵活用」、あるいは「他人のアタマ活用」である。

改善制度では

「自分の問題は、自分で考えて、自分

で改善しなければならぬ」という規則はない。

それよりも、むしろ「他人のアタマ」を活用するほうがいい。

なぜなら、人間の「アタマ」は「一人にひとつ」しかない。だから、いくら「アタマが良い」と威張っていても、「ひとつのアタマ」で考え出せるアイデアには限界がある。

ところが、世の中には「他人のアタマ」は、いくらでもある。しかも、それらは、それぞれ異なる体験や経験に基づく「異なる知恵」を持っている。なのに、「改善の苦手な人」ほど、自分のアタマだけで考えて

「アイデアが出ない」

「どうしたらいいか、わからない」——と悩んでいる。

ところが、「改善の上手い人」は「他業種・他社・他職場」の「改善事例」を数多く見て、それらの「改善のノウハウ」を活用している。それこそ本場の「改善力」である。

共有化すべきは

「改善の原理・原則」や

「定石・発想・考え方」である

改善活動を「持続・継続」定着化→
「活性化」させるには「改善事例の共有
化」が不可欠である。

だが、厳密には、共有化するのは、

「改善事例」そのものではなく、

◎改善の原理・原則・構造

◎改善の定石・方程式・公式

◎発想・考え方
——などである。

☆

なぜならば、「改善事例」そのもの
の共有化を訴えると、

◎「自分の仕事」とは違う「職種」だ

◎「自分の仕事」とは違う「業種」だ
——と言う人が出てくる。
そして、

*職種が異なるから、参考にならない

*業種が異なるから、役に立たない
——という声が出てくる。

たしかに、「事例だけ」を示して、

◎自分の改善に「役立つ」てくれ

◎自分の改善の「参考」にしてくれ

◎自分の改善の「ヒント」に
——と、言われても、多くの人は、

「自分の仕事」の改善に、
◎そのまま使える事例

◎ピッタリの事例

——でなければ、

*役に立てられナイ

*参考にならナイ

*ヒントにできナイ
——と言うだろう。

☆

「消化力」のない人に「生の事例」
を与えると、「消化不良」や「拒否反
応」となる。

そのような人には「他職場・他社・
他業種の事例」を消化↓吸収して、
「自分の改善」に応用・活用デキルよ

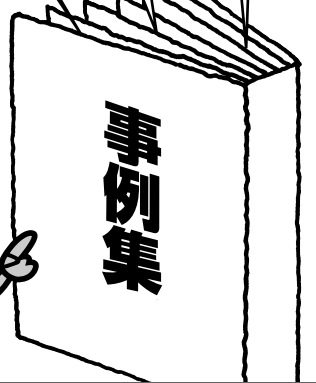
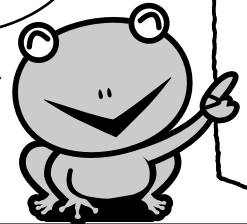
定石 発想 考え方を共有化

使える
定石

応用できる
考え方

役立つ
発想

自分の仕事の
改善に
活用すべし



共有化

↓
次の改善の参考にする

うに加工してやらなければならない。

ただ単に「改善事例」を集めただけ
の「改善・事例集」では役に立たない。

その改善の「原理・原則・構造」を
解説し、事例に含まれている「定石・
発想・考え方」を示すこと、

つまり、「事例・教材化」しなければ、
「次の改善」への「ヒント・参考」に役
立てることはできない。

単なる「事例集」を「事例・教材化」
するには

①事例の選択

②事例の分類

③定石の記入——などが必要だ。

☆

すでに、「改善の方程式」や「改善
の定石」に関する考えた方が理解され
ている場合は、それだけでいい。

だが、そうでない場合、それらの
解説が必要。また、「改善の定石」や
「問題↓定石の対応表」などの添付も
必要だろう。

「事例教材」の目的は何か。それは「事例+定石」の組み合わせを数多く蓄積すること。

そして、それらをマネて、パクって、自分の改善に活用することだ。

もちろん、「改善の達人」は自分でイロイロな改善から定石を読み取り、それらを大量に蓄積している。

だが、「改善の苦手な人」はそれができない。そして

* 「職種」が違うから役に立たない

* 「業種」が異なるから応用できない

——と言っている。

☆

社員の改善に対する「意欲・能力」を開発するための「補助具」としての「事例教材」の選択基準は、次の3点である。

- ① 簡単な改善
- ② わかり易い改善
- ③ 社員にメリットのある改善

☆

まかり間違っても、「優秀事例」など選んではならない。なぜなら、「優秀事例」効果の大きな改善であり、それらは「会社にとってメリットある改善」にすぎないからだ。

「改善意欲の開発」には「改善」自分にとって得」ということが実感↓納得できる事例、つまり、「社員にとって得」という改善を選択すべき。

また、「複雑で、大掛かりな事例」はダメ。「簡単で分かり易い事例」を選択すべきである。そのほうが「改善の定石・発想」を簡単に読み取り、それらを手つとり早く「自分の改善」に応用・活用できる。

「事例教材」の「分類基準」

大量の「改善事例」を、ただ単に、「かき集めた」だけでは、消化力の低い人を混乱させる。

ゆえに、わかり易いように、消化しやすいように、「仕分け」分類が勧められる。とりあえずは、次のような「分類基準」が勧められる。

◎ 「改善3原則」の分類

- ① やめた改善
- ② 減らした改善
- ③ 変えた改善 (○○化+○○活用)

◎ 「問題↓対応別」の分類

- * 「探す」↓「探さない化」
- * 「間違える」↓「間違えない化」
- * 「遅れる」↓「遅れない化」
- * 「危ない」↓「危なくない化」

◎ 「改善の定石別」の分類

- ・ 見える化 (視覚化・可視化)
- ・ 目立つ化 (色分け化・目印化)
- ・ 定期化・定型化・定置化・定例化
- ・ 一体化・一本化・一元化・一括化
- など。

事例教材化のための分類

事例を「集めただけ」では、単なる「事例集」に過ぎない。

それらを**分類**→**定石付加**で、**事例 - 教材**ができる。教材化には、次のような分類が勧められる。

1) 改善**3原則**の分類 (発想別の分類)

- ① **やめた**事例 (不要やめた・ムダやめた・惰性やめた)
- ② **減らした**事例 (部分的な廃止・停止・削除)
- ③ **変えた**事例 (○○化・○○活用など)

2) **定石**別 (「問題→対策」の対応表による分類)

- ① イチイチそのつど→あらかじめ (事前対応・先手対応)
- ② さがす (アチコチ)→定置化 (探さナイ化・探し易化)
- ③ ぐちゃぐちゃ (複雑・煩雑)→スッキリ化 (整理・整頓化)
- ④ 別々・バラバラ→集約化・集中化・一本化・一元化・一括化・統一化 (詳細は、別途、「問題→対策の対応表」を参照ください)

3) 改善の**レベル3段階**の分類

- ① **防止** (ない化) : 間違えナイ化 (ボカよけ化・フール・ブルー化)
- ② **抑止** (にく化) : 間違えニク化 (表示・警告・強調・目立つ化など)
- ③ **緩和** (ても化) : 間違えテモースグ、発見できる化・訂正できる化

4) **連続改善**事例 & **複合改善**事例

- ① やってダメなら、また改善
- ② やって良ければ、また改善
- ③ ヒント・参考・拝借・マネ・パクリ・応用

高速・大量の 改善的・改善発表会

高速・大量の 改善的 改善発表会

- ① ワンミニッツ発表
- ② 手っとり早い発表
- ③ 気軽な発表



改善前	改善後
こんな問題があった	こうしてみた
効果 少しは良くなった	

- ① わかりやすい事例
- ② おもしろい事例
- ③ 簡単な事例

改善発表会の目的

では、「改善発表会」の「目的」は何か。それは、「お互いの改善事例」の共有化である。

わかり易く言えば「お互いの改善」を

* マネて、パクって、

* さらに改善、

* もっと改善するため

—である。

ゆえに、その「発表会の目的」を

「より良く達成する」ための「やり方の工夫」、あるいは、「方法変更・手段選択」があれば、それが「改善的・改善発表会」である。

それでは、具体的には、どのような「やり方の工夫」が勧められるだろうか。代表的な観点としては、次の4点が勧められる

- ① 発表事例の「選択基準」
- ② 「大量・高速発表」（形式不要）
- ③ 「改善の定石」による解説
- ④ 「事例付・表彰状」

「改善」に関することは、すべて、「改善的」であるべき。ゆえに、「改善発表会」も「改善的」でなければならぬ。

では、「改善的」とは、どういう意味か。カイゼンにはイロイロな意味があるが、まずは、「改善の3定義」に従うならば、

- ① 「仕事のやり方」の工夫・変更
- ② 「大変」でなく、「小変」である
- ③ 「知恵」による制約対応・現実対処

また、「別の角度」から、

- * 「やり方」を変えての「手抜き」
- * 「不要・ムダ」からの「手抜き」

- * 「目的」を意識した「手抜き」
 - * 「マジメな手抜き・真剣な手抜き」
 - * 「マンネリ打破・固定観念脱却」
 - * 「前例打破・惰性脱却」
 - * 「手っとり早さ」の重視
 - * 「手軽に、気楽に、実施」
 - * 「しつこく、しぶとく持続・継続」
- などの意味もある。
- これらを「ひとこと」で言えば、
- ◎ 手間をかけず、
 - ◎ カネをかけず、
 - ◎ 知恵を出すのが改善
- ということになる。

☆

しかし、改善で、最も重要なことは「目的」との「合致」である。なぜなら、「改善」の「正式な定義」は

- * 「目的」を
- * より良く達成するための
- * より良い「手段の選択」
- * より良い「方法の選択」

—だからである。

ゆえに、イロイロな「改善の要件」をいくら備えていても、「目的」に合致しないものは、けっして「改善的」とは言えない。

発表事例の選択基準

「改善的・改善発表会」における発表事例の「選択基準」は

- ①社員にメリットのある改善
- ②おもしろい改善
- ③わかりやすい改善
- ④簡単な改善

——など。

一般的に、発表会には「優秀事例」が推薦され選抜される。だが、それは「改善的」ではない。

なぜなら、「優秀事例」とは、多くの場合、「効果の大きな改善」である。それは「会社にとって、メリットの大きな改善」である。

しかし、改善は「会社のため」にやるものではない。ゆえに、「会社のため」の改善が主流となっている発表会は改善的ではない。

☆ 「自分の仕事の改善」は、何よりも「自分のため」にやるものだ。つまり

「自分の仕事」が

*ラクに、

*快適に、

*安全に

——できるように、「自分のため」に、「自分でやる」のが改善である。

ゆえに、「改善的・改善発表会」の「発表事例」は、

◎社員にとってメリットのある改善

◎社員が「得」をした改善

◎社員にとって楽しい改善

——を中心に選ぶべきだ。

わかり易く言えば、

◎ラクちゃん化

◎やり易化

◎イライラしない化

◎バタバタしない化

◎間違えない化

◎迷わない化

——などの改善を「主役」とすべき。

また、効果の大きな「優秀事例」は一般的に、高度で専門的なものが多い。だが、そのようなものは、あま

り役に立たない。

なぜなら、部署や専門が異なると、

そのような「高度な事例」など、その内容が理解できないからだ。

よくワカラナイのに、なんとなく、「すごいな」

とオソレいつているだけである。

それどころか、

「あんなスゴイことはデキナイ」

「自分にはムリだ」

と思わせ、却って、改善活動のブレーキにもなりかねない。

そのようなことに、多くの社員の

貴重な時間を使って、ワザワザ発表会をやるのは全くのムダ。「ムダなこと」は「やめる」のが改善である。

改善発表会の目的は「次の改善」につながるように「具体的な改善事例」を通じて「改善の原理・原則・定石・発想」の共有化である。

「次の改善」につながらない発表は「改善的」ではない。「次の改善」への「ヒント、参考、励まし」となるよう

改善事例の選択基準

一般的に発表会といえば、高度な優秀事例が選ばれる。だが、それは改善的ではない。なぜなら、改善発想や定石を

マネて、パクって、さらに改善、もっと改善

という「改善発表会」の「目的」に反するからだ。
「目的」に反するものは「改善的」ではない。

事例の選択も目的に合致したものでなければならない。よって、次の3つの基準・観点から、事例を選択している。

- ① **ヒント・参考**になる改善の**定石・発想**
- ② **簡単**な改善、**わかりやすい**改善
- ③ **おもしろい**改善（盲点・前例&情性打破）

④社員にメリットのある改善

「自分の仕事の改善」は**自分のため**にするもの。
全社員が「自分の仕事」を**ラクに、快適に、安全に**できるよう「仕事のやり方」を工夫すれば、

その**結果**として、品質・衛生・効率・生産性も向上。
また、**事故や不良**なども減るので、**会社**の利益にもつながる。

* **改善**＝やり方を変えての**手抜き**（手段選択・方法変更）
「単なる手抜き」は効率や品質の低下をもたらす。
だが、そこに「やり方の工夫・変更・選択」があれば、
自分もラク、そして相手もトクという**改善**となる

問題のサイズに
応じた
「使い分け」

1件につき3分間以内



大変な発表

中変な発表

小変な発表

大掛かりな発表

QCストーリーにそって

小変=改善は
気軽に・手軽に・手っとり早く

な「わかり易い簡単な改善事例」を中心とすべきだ。
「わかり易い事例」なら、誰でも、簡単に、その改善の「原理・原則・定石」を読み取ることが出来る。
そして、「自分の仕事の改善」に応用・活用できる。

大量の高速の発表

「発表会」と言えば、多くの人が「QC発表会」をイメージするのではないだろうか。
つまり、QCストーリーに沿って、だいたい15〜20分間くらいかけて、じっくり説明するスタイルだ。
もちろん、「中サイズ」の問題に、長時間にわたって取り組み、解決したという場合は、そのような「発表のやり方」も結構だろう。
データを取り、QC7つ道具などのツールを活用して、分析し、計画的に改善した——というプロセスの

発表もいだろう。

しかし、弊害も多々ある。いわゆる「発表のためのQC活動」や「大人の学芸会」などと揶揄されたように

- * 過剰な演出演技
- * 偽装された発表
- * 多大な準備時間

——などで、ウンザリしている人も多いだろう。

最大の弊害は、ナンでもカンでも、データを取って、分析して——というQC手法でなければ、という形骸化・固定化である。

そのため「問題のサイズ」によって「取り組み方」を「使い分ける」という「判断力」や「柔軟性」が失われてしまう。

とりわけ、「日常業務」にて、日常的に発生している「小さな問題」に対しては、「形式的な方法」は不要だ。いや、不要どころか、有害でもある。なぜなら、「固定化された手法」は、「状況に応じて、選択・変更する」と

いう「改善的融通」がきかなくなり、「手っとり早い改善」が阻害されるからだ。
「小さな問題の解決」には「仕事のやり方」を「小さく変える」小変で充分だ。

「小変=改善」は「手っとり早さ」を重視する。ゆえに、「小変=改善」の発表も、手っとり早いほうがいい。そこで、「1件=1分間」の「ワン・ミニッツ発表」が勧められる。単に、何を、
◎ どうして、
◎ どうなったか
を発表するだけなら、「1分間=60秒」で充分だ。

もちろん、それだけでは、「改善の定石や発想」までは、わかりにくいかもしれない。その場合には「2分間」の解説追加が勧められる。
「解説の方法」にもイロイロあるがたとえば、

- ① 「改善者・本人」が解説する
- ② 「改善者の上司」が解説する
- ③ 「事務局」や「推進委員」が解説
- ④ 「外部の講師」が解説する

当初は「外部講師」が解説の見本を示すのでもいいが、やがては
* 上司のコメントと講師の解説
* 上司のコメントと本人の解説
——などのように、イロイロな「組み合わせ」の工夫が勧められる。

いずれにしても、とにかく、「1件につき、3分間以内」というのが、高速大量発表の「改善的・改善発表」の原則である。
これなら、「外部ゲスト発表」などを交えても、2〜3時間で「30〜50件」の大量の改善を共有化できる。

「方程式と定石」による
改善的・解説

また、その解説も「難しいこと」をコメントしたり、あるいは、形式的

な「どうでもいいこと」をウダウダ説明することではない。

「改善の解説」も、やはり「改善的解説」でなければならぬ。それには「改善の方程式と定石」を使っての説明が勧められる。

その改善に含まれている「改善の定石」を読み取り、それらの関係を説明するだけで、「次の改善」につながる「改善的・解説」となる。

例えば、「部品を探すという問題」を解決した改善に対しては、

- ① なぜ、探していたのか
- ② アチコチに置いていたから
- ③ 「さがす原因」が「アチコチ」なら、その対策は「原因の裏返し」。

ゆえに、この場合は「定置化」置く場所を定める」という「改善の定石」で改善となる。

④ もちろん、「定めっ放し」はダメ。「定置化」表示」を組み合わせ「見える化」誰でもわかる化」となる。

そして、「元に戻し易化」元に戻る化」で、「定置化」が維持・持続できる。

⑤ そのおかげで、「探さない化」、あるいは「探し易化」というすばらしい改善となっている

— などのように。

「事例付・表彰状」
あるいは「表彰状付・事例集」

発表会と言えば、「表彰状」がつきものだが、それもやはり「改善的」でなければならない。

一般的な「形式的・表彰状」はどうだろうか。その文面は、たいていは「アキタリの、どうでもいいような文言の羅列」ではないだろうか。

そのようなものは「改善的」ではない。なぜなら、「改善に熱心な人」は、在職中に何度も表彰される。しかし、毎回、「同じような文言の表彰状」で、異なっているのは「日付」だけと

いうのでは、なんともナサケない。

☆

改善は「具体的な事例」が命である。ゆえに、改善の表彰状にも「事例」の付加、つまり、「事例付・表彰状」が勧められる。

また、その文言も「優秀だから表彰します」などといった「アキタリの内容」ではなく、「改善の定石」による解説で

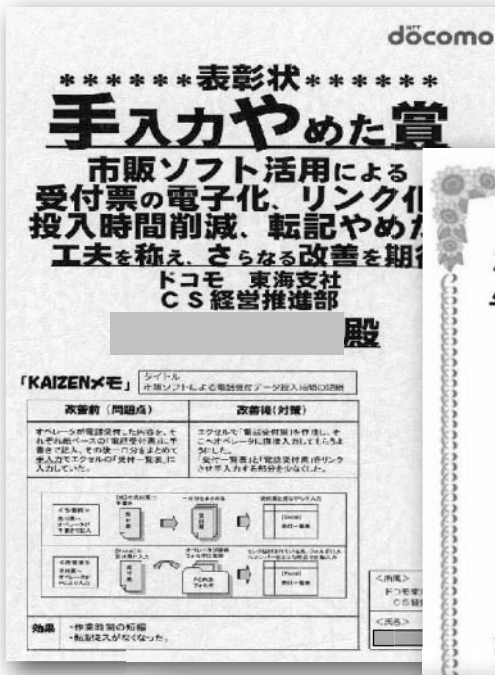
「どういう点が、スバラシイか」「どういう点が、評価されるか」

— などを具体的に、明確に説明している表彰状である。

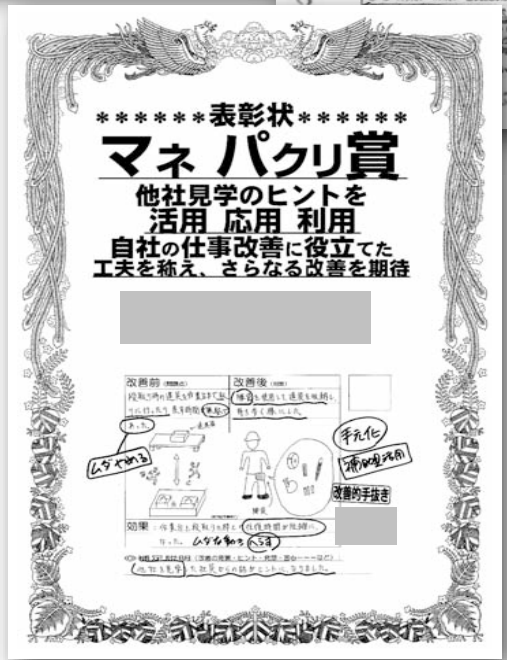
これなら、10枚の表彰状ならば、10枚とも、すべて異なる内容である。それを綴じれば、そのまま「表彰状付・改善事例集」となる。これこそ、「改善的・事例教材」である。

もちろん改善的表彰には、いろいろなタイプやパターンがある。とりあえず左頁に3社の表彰状の見本を紹介する。

NTTドコモ 東海支社



磐田市役所



静岡中小企業懇話会